

# 佳作

## 大きな金魚

舛田 順一

「おかあちゃん、おかあちゃん……」

大きな金魚が、ゆつくりと目の前を通り過ぎてゆく。僕は必死で大きな光る金魚を追いかけて、母とつないでいた手をうっかり離してしまう。母に名前を呼ばれて振り返ると、その後ろ姿が人ごみに消えていくところだった。顔の見えない母がスローモーションのコマ送りの映像のようにゆつくりと消えてゆく。泣いても、泣いても母はもうどこにもいない。

「あなた、あなた。栄一さん。……、大丈夫なん。えらい、うなされとったよ」

目を開けると、心配そうに僕を覗き込む妻の裕子の顔が見える。

「ああ、……夢か。ごめん。また、子供の頃の夢を見ていた」

不安そうな顔をした裕子が小さな声で聞く。

「また、金魚の夢なん？」

三歳の頃、僕は香川県の高松駅の構内で迷子として保護されたそうだ。駅のアナウンスで何度呼びかけても誰も現れず、若い駅前の交番の巡査が僕を抱きかかえて、構内をずっと親を捜して歩き回ってくれたらしい。駅員が目撃していた僕と同行し

ていた母親らしい人は見つからぬまま、結果的に迷子の書類には育児遺棄と記入された。僕は高松市内の児童養護施設に預けられ、そこで高校卒業まで育った。

親から捨てられた僕が、身につけていた唯一の身元の分かりそうなものが、赤い袋に金糸で「津島神社」と刺繍したお守りだった。そんな大切なお守りを僕は何度も捨てようとした。学校で一番の成績なのに保証人がいないからと奨学金がもらえず大学進学をあきらめた日には、悔しくて母を恨んで泣きながらお守りを捨てようとした。ゴミ焼却炉に放り込んだものを、お節介にもそうじ当番だった、その当時クラスメートだった妻の裕子が見つけて、僕に届けてくれたことで燃えずに残った。

高校を卒業すると施設の仲間たちは都会に出ていったが、僕は香川県丸亀市の職業訓練学校に通ってコンピューターの資格を取ると、丸亀市にある情報システムの会社に就職して香川に残った。都会へ出ていかなかった理由は、僕を捨てた母が近くにいるのではとの思いからだ。唯一の絆であるお守りの津嶋神社に近い場所にいれば、もしかして母親に会えるのではと

甘い期待があったからだ。僕は僕を捨てた母をずっと恨んでいた。ところが年齢を重ねるうちに、自分が子を持つ親になってみて、少しずつ母にもどうしようもない事情があったに違いないと思うようになり、少しずつ母親への恋しさが募り会いたくて堪らなくなった。

津嶋神社は香川県三豊市にあり、瀬戸内海に浮かぶ神社だけがある小さな津嶋にある。子供の守り神として、香川県ではとても有名な神社だ。陸地から島までは二百五十メートルあり、普段は通行できないのだが夏の祭の二日間だけ橋に板がかけられ橋を通ることができる。親子が手をつなぎ渡り、神前で無事に育つことを祈るのだ。

三歳の記憶しかない僕は何も覚えていないのだが、僕も母と橋を渡ってお守りを買ってもらったに違いないと勝手に想像している。ただ解せないのが、巨大な光る金魚を見た記憶があることだ。夏の祭では花火も打ち上げられるが、金魚に見える花火というものに、まだお目にかかったことがない。

「今日から出張だっけ」

妻の裕子が子供たちの弁当を作りながら、眠そうな顔をして言う。陸上部の学生時代の細かった面影はなく、縦か横か分からないほどにふくよかな体型である。丸亀発の朝一の特急は午前七時発だ。寝過ぎして遅れそうな僕は、トーストを口にくわえたまま慌てて背広に着替える。

「ああ、愛知県に出張だ。何ヶ所か回るから三日ほど戻れない。子供たちを頼むな」

高校二年の娘と中学三年生の息子は、早朝なのでまだ起きてこない。もうすぐ五十になる僕の仕事は、自社で開発した機械メーカー向けの生産管理のコンピュータシステムを販売する営業マンだ。僕も妻にえらそうに言えた体型ではなく、会社の健康診断ではいつもコレステロールが高くウエストも九十センチもあり、仲の良い保健婦さんからはダイエット方法をいろいろと指南されている。

丸亀駅から特急に乗り瀬戸大橋を渡り岡山へ、新幹線に乗り換えると名古屋まで二時間強だ。午前中は名古屋市内の馴染みの会社を営業で回る。お昼は大好きな味噌煮込みうどんを食べると、名鉄名古屋駅一番線ホームから岐阜行きの急行に乗った。十分弱で須ヶ口に到着し、津島線に乗り換えて十五分、目的地の津島駅に着いた。

名古屋は何度も来ているが津島は初めての訪問だ。途中の名鉄の車窓からの眺めが僕好みののどかな景色で、初めて降りた駅なのに心がとてもほっこりする。正面出口を降りると、左手にバスターミナルがある。その景色を見た僕は不思議な気持ちになる。いつか見たことのある風景のような気がしてならないのだ。僕は日本中を営業で回っており、地方都市の何処にでもありそうな駅前のバスターミナルの風景なので、何処かは思い

出せないが今までに訪ねたことのある街に似ているのかもしれないと、その時は思っていた。

津島では津島市民病院の近くにある津島精密機械という会社を訪問し、コンピュータシステムのデモ説明会を行う予定だ。電話でアポイントを取った業務部の山上部長は、午後二時まで本日出荷の作業で忙しいので、二時すぎに訪問するように指示されていた。駅構内には売店しかなく時間をつぶす所がなかった。時刻表で津島市民病院前を経由するバスの出発時間を確認した後、お茶が飲める場所を探す。あたりをきよろきよろしている、駐車場の向こう側にバンビという看板の喫茶店を見つけた。重いキャリーバッグの荷物を引っ張りながら、駅前からぐるりと回って一筋奥の筋に入る。喫茶店のドアを押して中に入ると、昔ながらの純喫茶という風景が広がっていた。入り口近くのこげ茶色のビニール貼りの年代もののソファアの席に腰掛ける。

「いらっしやい」とカウンターから声がかかる。

水の入ったコップをお盆に載せ、細身の年配のご婦人がカウンターから出てきた。

「ご注文は何になさいます」

「コーヒー下さい」

昔はさぞかし美人だったろうと想像できる、目鼻立ちの整ったママさんが一人で切り盛りしているお店のようだ。例えると

二時間サスペンスのドラマに、旅館の女将として出てきそうなタイプのご婦人だ。しばらくしてコーヒーが出てきたが、頼んでもいない厚切りのトーストが半分とゆで卵がついていた。

「えー。僕、コーヒーしか頼んでないですけど」

「モーニングです」

ママさんはニコツと笑いかけた。正午を過ぎているのにモーニングとは、さすがモーニングで有名な名古屋市の近郊の都市だと驚いた。名古屋市内で食べた味噌煮込みうどんでお腹はいっぱいだったのだが、用意してもらったのでありがたく頂いた。一時間以上待ち時間があるので鞆からノートパソコンを取り出すと、本日行うコンピュータシステムのデモンストレーションの手順を確認していた。長時間居座って迷惑な客の僕にママさんは昆布茶に小袋のお菓子まで出してくれた。津島という土地柄なのか、この店が特別なのか、ママさんのおかげで初めて来た津島の街が好きになる。

鞆からお客様向けのデモ資料を取り出して内容のチェックをしようと、脱いで椅子にかけていた背広の上着のポケットにさしていたペンを取ろうとしていて、ポケットの中に入れていた母からもらった大切な赤い津島神社と刺繍されたお守りが落ちた。気付いたママさんが落ちたお守りを拾ってくれた。手渡す時に、お守りを見て言った。

「あら、大きいキャリーバッグだから、遠くから来た人だと思っ

ていたのだけど、地元の方だったの」

「いいえ、四国から来ました」

「え、でもそのお守り、津島神社さんのものでしょ」

「はい、津嶋神社の、香川県の家の近くにある津嶋神社のものなのですけど」

「香川？ 香川県にも津島神社があるの。私が言っているのは、この津島という地名にもなっているように、津島の中心にある津島神社のことなだけだ」

「えー、ここにも、津嶋神社があるんですか」

駅を降りた時に津嶋神社のある島の津島と同じ名前の市だとは気づいていたが、ここにも津嶋神社があるらしい。ママさんは津島市の観光パンフレットを取り出してみると、津島神社の写真を見せながら説明してくれた。津島神社は日本中にある病気、災難よけの神様の天王さんの総本社であり、戦国時代はあの有名な織田信長が氏神としていた神社なのだそう。写真を見ると香川の津嶋神社より社は大きくりっぱだ。七月の第四土曜日と翌日に行われる尾張津島天王まつりは、日本三大川祭りのひとつで六百年の歴史があるらしい。天王川公園で行われる宵祭りで巻藁舟に飾られた無数の提灯が美しいと説明されて、祭りの写真を見せてくれた。

「ほらこれが、巻藁舟。本物はとても綺麗で幻想的よ」

五艘の舟の上に五百余りの赤い提灯を、丸い傘のような形に

組み上げて乗せ、暗闇の川面に浮かべて、あかりをつけた夢幻的な写真を見た瞬間、僕は声を失った。いつも見る夢に出てくる、あの大きな金魚がそこにいたのだ。

ママさんは続けて、翌日の朝祭で行われる屋台の上に能人形を乗せた六艘の車楽舟の話がされていたが、僕の耳にはもう何も届かなかった。頭が大きな金魚の映像でいっぱいになり、我慢できずに再びお守りを取り出すと、話を遮るように僕は聞いた。「ママさん、すみません。このお守りって、本当に津島神社のものでしょうか」

ママさんは手に取ってじっと眺めている。

「そうね、けっこう色あせて年代もののお守りだから自信はないけど、この濃い赤色には記憶がある。たぶん昔、津島神社が授けてくれていたお守りと同じだと思うわ」

僕はずっと香川県にある津嶋神社のお守りだと信じてきた。津嶋神社の嶋は山へんに島だから違和感があったのだが、津嶋神社のある島自体の名前は津島なので、昔はお守りも山へんなしの普通の島を使っていたのだろうと勝手に解釈をしてきた。頭の中が混乱していた。それならなぜ香川県の高松駅で捨てられた僕が、遠く離れた愛知県の津島神社のお守りを持っていたのだろう。しかし大きな金魚に見える提灯で飾られた巻藁舟の写真を見て、初めて降りた駅前の風景に懐かしさを覚えた事実を思うと、強烈な鳥肌がたつてゾワゾワと電気が流れるような



感覚が僕の体中を走った。全てが間違いだったんだ。

「津島神社の場所は近いのですか」

顔色の変わった僕の様子を見て、ママさんは何か事情があると察知してくれたようで、地図まで書いてくれた。時間がきたのでママさんにお礼を言い、僕は喫茶パンビを後にした。

予定どおり津島精密機械という会社を訪問し、コンピューターシステムのデモ説明会を行ったのだが、お客様には申し訳ないのだが心ここにあらずという状態で支離滅裂なデモンストレーションになってしまった。システムを見てもらった山上部長は、筋肉質で体育会系の方だった。素直に説明の不備を謝って、一時間程で説明会を切り上げた。

急いで津島市民病院まで戻ると、病院前の乗り場からタクシーで津島神社へ向かった。大きな赤い鳥居の前でタクシーを降りると、りっぱな楼門が見えていた。豊臣秀吉が寄進した大きな楼門をくぐると、右手に見える本殿はとても大きくりっぱだ。本殿は檜皮葺で徳川家康の四男で清洲城主だった松平忠吉の健康を祈願して妻の政子が寄進されたものらしい。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と、オールキャストが津島神社にかかわっており重厚な歴史を感じる。

まずは参拝してからと思ったが、気持ちが焦ってそれどころでない。僕は本殿入り口横にある御守り授与所へ直行した。津島精密機械でコーヒーをご馳走になったのに、何故か口の中が

乾いて仕方がない。お守りが本当にこの神社のものか知りたい。窓口には巫女さんが何人かいたが古いことは知らないのではと思ひ、たった一人だけ座っている若い男性に話しかけた。

「すみません。このお守りなんです、ここで授けられたものでしょうか」

怪訝そうな顔をした若い人に、お守りを渡して見せる。

「このお守りですか」

不思議そうな顔をしながらも、痩せて黒縁めがねをかけた彼は、お守りを手に取りじっくり眺めている。

「すみません禰宜、このお守りですが、うちのものでしょうか」  
若いから知らないのか、奥の方に座っている年配の人に尋ねてくれる。

「おやおや、懐かしい。これは、三十年以上前のものですね」

白髪で短髪の年齢を重ねた小太りの男性が窓口に出した。「お尋ねの、このお守りならうちのものです。大切にされておられるようですね」

「はい、母からもらったものなので」

「いやね、実はこのお守りの青色の袋のものを、今でもよく見ますものでな。赤色のもあったんだ、懐かしいな」

若い人が年配の人の話を聞いて驚いたように言う。

「ああ、確かに。田村のおばあさんがいつも大切に持っているお守りと同じだ」

突然の言葉に心臓が縮み上がる。夢なら醒めないで欲しいと願う。あまりに動揺してしまい、うまく言葉が出てこない。

「あのう……、すみません。……、その田村さんというのは、どなたなんですか」

年配の人が代表して答える。

「信仰深く熱心なご婦人です。毎日夕方になると欠かさずお参りされております。今日はまだ見ないようだが、ぼちぼち来られる時間だと思えますよ……」

すると若い人が左の拝殿の方を見て言った。

「噂をすれば、ほら。田村さんが見えられた」

振り返ると小柄で白髪の上品そうな年配の女性が、南門から拝殿の方に向かってゆつくりと歩いてくるのが見えた。僕には、夢の中と同じようにスローモーションのコマ送りの映像のようにゆつくりと見えた。夢のように消えては大変と、慌てて拝殿の方へ行こうとする僕を、追いかけるように年配の人が聞く。

「失礼ですが、あなたのお名前は」

「はい。田村栄一です」

〈了〉